



吐き気がした。

どの面を下げて自分も含め、あの席にいた人物に手向けられた花に対して上辺だけの悲しみの言葉を吐いているのか。

席の主がいじめ…というよりも拷問であろう、それを苦に自死を選び半年以上が経った。

調査委員会の設立から聞き取りにより、調査検討が行われ主犯とされる何人かは、傷害で刑事事件で起訴され更生の必要性から少年院に行くであろう。

黙認していた教師もクラスを纏める能力が不足し、彼を有体に言えば生贄とし、クラスの体を保っていたと報告書で明文された。

当初いじめの事実認定及び対応をしなかった学校にも非難が殺到した。

公に自分達のしてきた事が広まった瞬間にまるで、部外者のように謝罪の言葉が出てきた。

非人道的な行為を黙認してきた教師。

腐臭を嗅ぎつけて来るようなマスコミ、配信者、活動家でもない怒りをぶつけたような人間、表面では怒りを内面では唾を引くような満面の笑顔で娯楽として今件を消費しようとするような連中。

今まで、助けようともせず、延いてはいじめに言動で加わったクラスメイト。

調査報告書では、能力のない学校側と中1ギャップを起因とした不安定さが噛み合い起きた事件とあったが、俺には、人間という生き物が持つ醜さに思えた。

そして、なによりこれまで冷ややかに糾弾しつつ、あの時彼の手を振り払った自分自身が一番醜く思えた。

外はあの日の様な透き通り、そして濃い色の青空であった。

同じように蝉の鳴き声が響く、それは清涼感とは程遠い不快感であった。



「なえ…叶聞　いてる？」

「ん？ああ？悪い悪い。」

目の前の親友は、今までの話とは、まるで世界が違うかのように純粋な目をしていた。幸子おばさん達が気を利かせて話をしていないのであろう。

正弘さんも動いてくれていたが、親友はまるで知らないようであった。…こいつは同じ立場ならどうするんだろうか。

いや、きっと変わらない。

その筈だ、誰もがその筈なんだ。

「でさあ…後藤の奴また、鬼塚さんに絡んでるんだよ。

体格いいからって、鬼塚さん小さいし、卑怯だよな全く。

この間もわざと意地悪してさ、クラスの奴も先生もなんか鬼塚さんに感じ悪いし、どうしたらいいんだろ？」

「お前、その傷…」

「あついや…触れないでくれてると思ったんだけど、まあその後藤とそのまま喧嘩になっちゃって、あっ泣いてないから…母さんに黙っててくれる？」

「…ああ。」

…なんで、なんでお前は…。

ただ、俺は…。

「なあ、怖くないか？お前だってもしかしたらクラスでいじめられるかもしれないし…俺は嫌だぞ…その、泣き言われても。」

「そりゃあ、叶なら上手くやるかもしれないけどさ…俺叶と違って馬鹿だし、でもほっとけないよ。」

「また、憧れのヒーローってやつか？本当お子ちゃまだな。」

「もう！いいだろ！

それに、ほらコレ…別にひとりって訳じゃないさ。」

泣いてるあいつを励ます体で、押し付けたいらないゴースル。

そんなもの、後生大事に持ってて馬鹿じゃないのか？

「叶がさ、傍にいてくれるみたいで勇気が出るんだ。

叶なら絶対、なんとかしようって分かってるからさ。」

「…。」

あいつの顔が、西日に照らされてまるであいつ自身が眩しく見えた。

違う…どうして、どうしてお前は、そんな目で俺を見るな…どうして、どうして俺を惨めにするんだ。

勇太。



ラヴォガリータモン、インペリアルドラモンが崩壊したビルの合間を高速で移動していく。

ラヴォガリータモンを追う形でインペリアルドラモンが追隨していた。

「勇太。」「ああ。」

（ベルスターモンの助言の通り、インペリアルドラモンは最高速度はラヴォガリータモンより上だけど…）

勇太は、進化の際に、敢えてラヴォガリータモンのサイズを通常より絞り小型にした。

通常サイズのラヴォガリータモンより大型のインペリアルドラモンは小回りが利かず、かつ密集したビル群では、勇太達が誘導しているのもあるが、どこかしらで身体をぶつけ速度が減速していた。

「だけど…」

全く、追隨をやめようとしないう、ビルの瓦礫が身体に当たってもお構いなしであった。

「手はず通り、あのプランで行くよ。」

「分かった…。」

ラヴォガリータモンがより速度を上げて、ビル群へ姿を消していく。

「逃がすかよ…!」

インペリアルドラモンがより速度を増し、強引にラヴォガリータモンを追いかけていく。



ビルの合間を潜り、インペリアルドラモンに死角が出来た瞬間であった。
「ワイルドブラスト!!!」

煙に紛れた黒色火薬が一気に爆発を起こす。
「チッ!」

瓦礫や粉じん、爆発により視界が塞がれ、インペリアルドラモンがビルへ突っ込み態勢を崩した。

その瞬間を狙い、ビルの瓦礫の中から勇太が飛び出してきた。

叶に向かい脚を振り下ろしたが、弾かれた。

勇太と叶の間に今まで見えなかったバリアが張られていた。

「チッ!」

「普通…究極体デジモン相手に人間一人で突っ込んでくる奴なんていないし、隙が出来ると言うよな…。

でも、お前は普通じゃねえしな勇太!だから、読みやすくて助かるぜ!」



上空から複数のエネルギー球体が降り注いでくる。
「なっ!? 自分達事!？」
「はっ! こいつはどうかは知らねえが俺は間違いなく助かるさ。
それにこいつはクローンだ。
幾らでも代わりはいるさ。」
「叶!!!!」



少し前に、廻り戦闘のできない人間や、デジモンとロコモンで避難していた。
山岳に入ったところであったマンティコアモンの大群に襲われていた。
「すみれさん! 乗客車両の屋根にもいる!」
「どうして、ここにこいつらが!?!」
ある程度戦えるデジモンが応戦するが、文字通り蟲のようにマンティコアモンが
現れてきた。



「きゃあああああああ!!!!」

マンティコアモンが乗客車両の屋根を引き剥がし、子供に襲い掛かろうとした。

「シンドウラモン!!!! パーヤヴァーハ!!!!」

「子供に手出すんじゃないわよ!!! おばちゃんそういうの一番嫌いだわよ!!!!」

宝杵から出た電撃がマンティコアモン達を吹き飛ばした。

「すみれさん! 捌き切れない! 後方に下がるしかない!」

「でも、そうしたら戦場の方に!? 私とシンドウラモン」

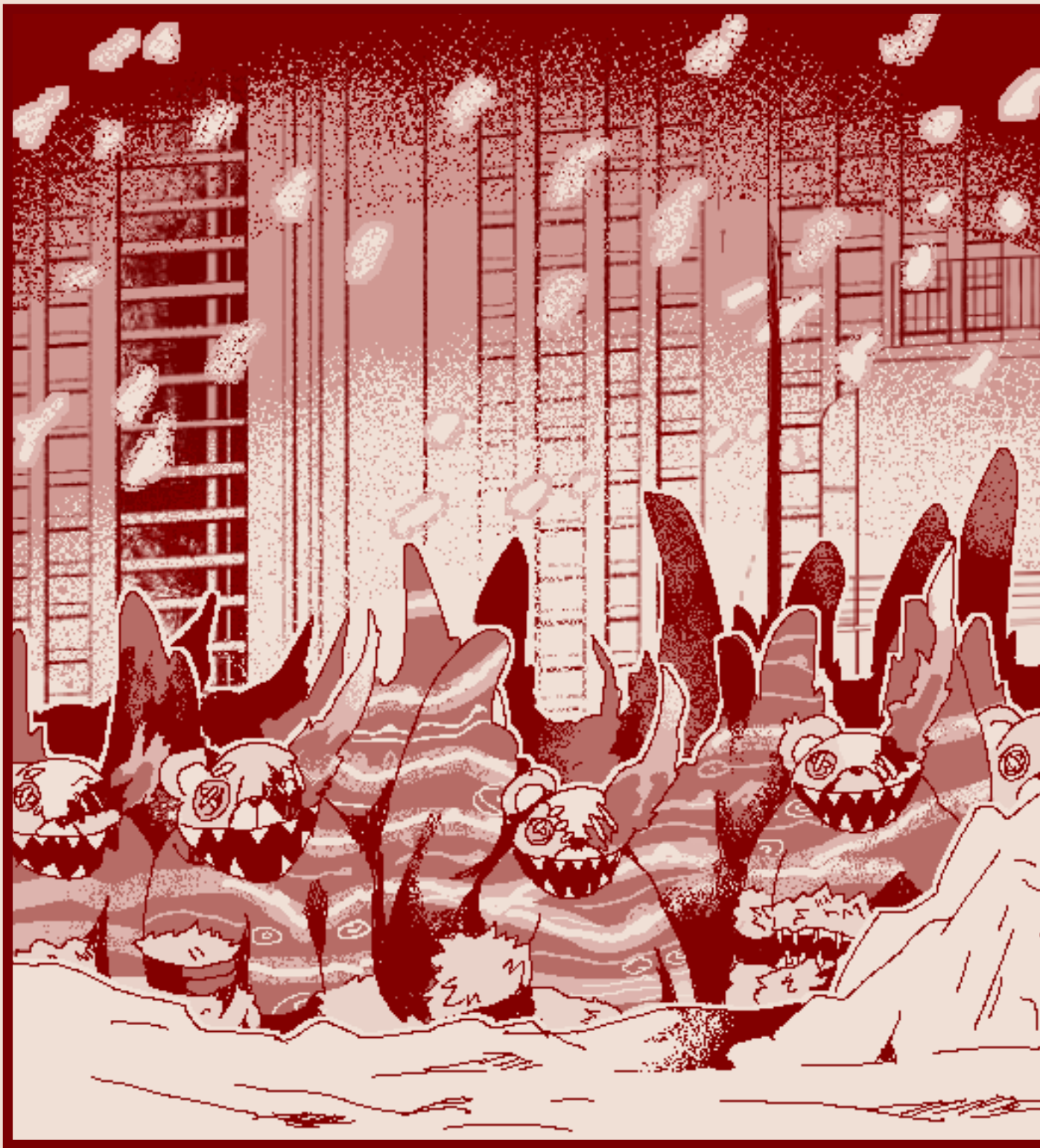
「すみれちゃん…宝杵あんま使ってなかったらちょっと出力が…」

「…撤収!!!!」

ロコモンが一気に後方へ下がり始めた。



轟音と共にビルの合間から、煙と共に巨影が現れた。
チンロンモンが周りを破壊しながら、その巨体より遥かに小さい目標、デーモン
に向けてぶつかっていた。
それだけではなく、戦場から様々な轟音が鳴り響いていた。



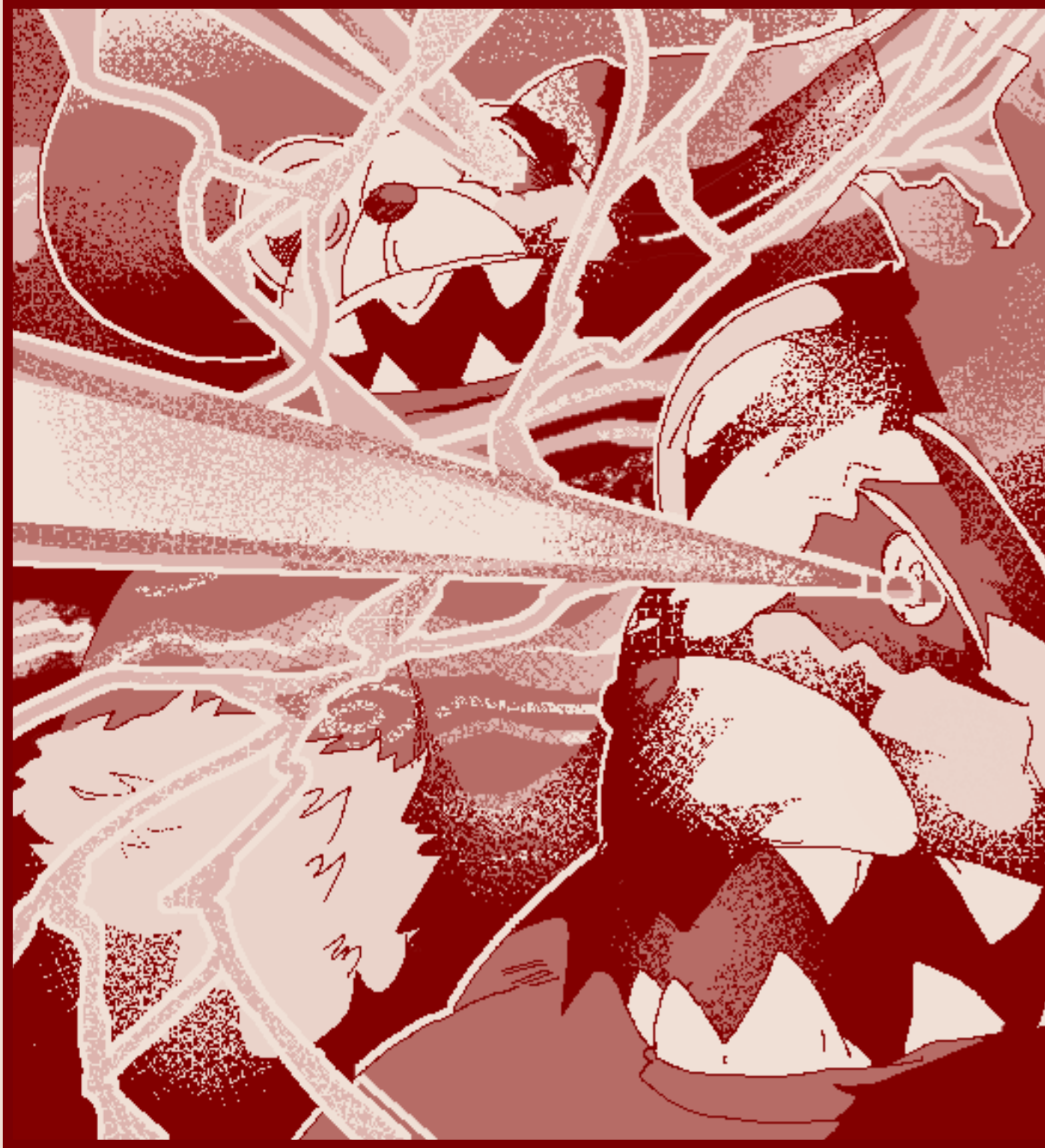
「三下（さんした）！またやって来たぞ！援軍だ！」

「なんで！誰も言ってねえのにデジモン達に三下（さんした）呼びが広まってるんだよ！クソ！来たのはなんだ!?」

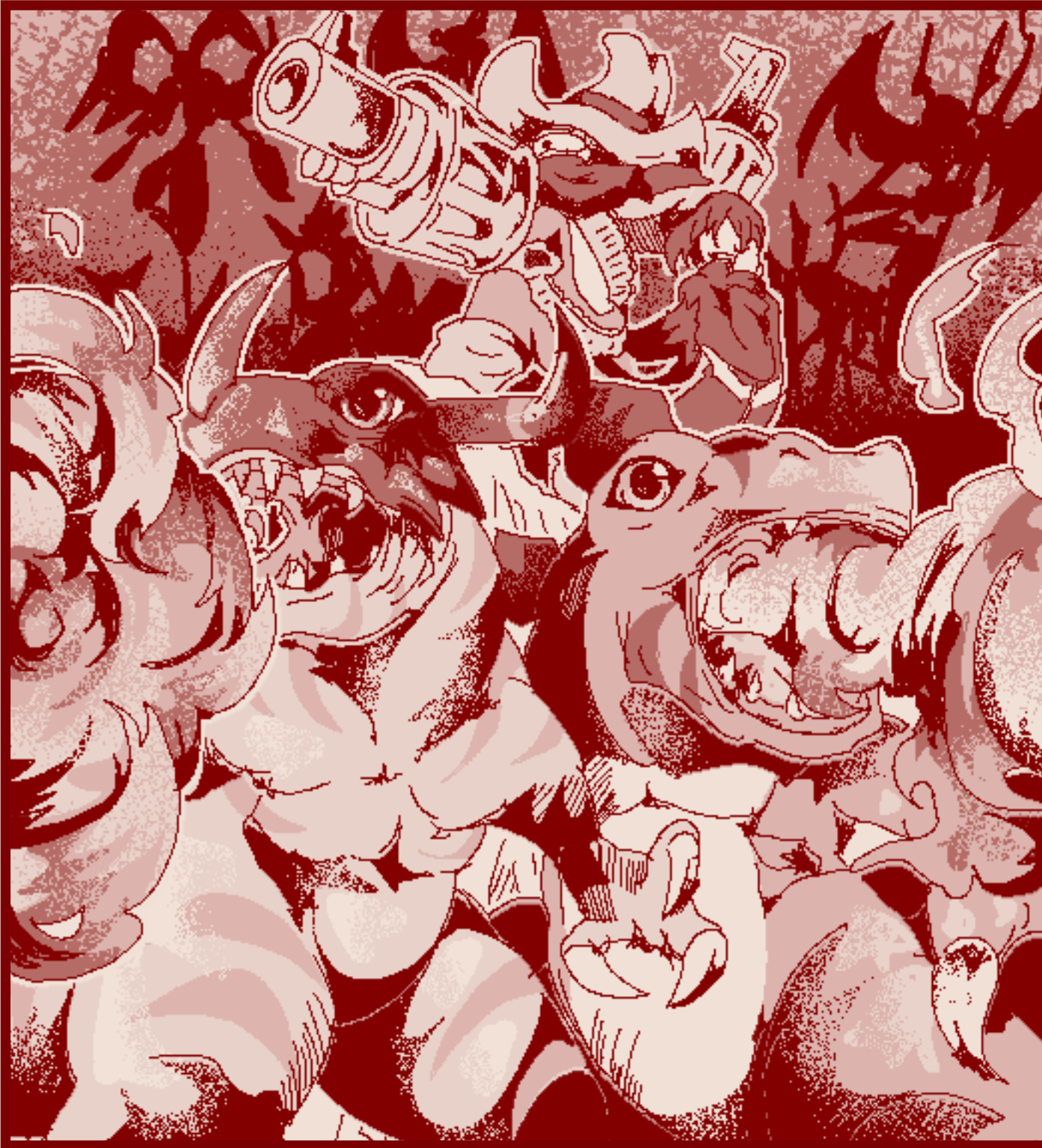
「確認したのはしもんざえモン！数百体規模だ！」

「なに!？」

オグドモンからビルをなぎ倒し、しもんざえモンの群れが軍隊を組んで侵攻してきた。



左目からスイートラブリーアタックで待ち構えるデジモンを吹き飛ばしていく。
「まずい!距離を取らせるな!あの左目のレーザー相当遠距離まで効果範囲がある!
事前に組んで奴と距離を詰めるか!ひとりなら守りを固めろ!」



「三下!こっちもやべえぜ!」

「しもんざえモンみたいにワンパターンじゃない分、ダークエリアから出てきた連中の方が厄介だ!」

「慎平やっぱりオレっちだけやるのは無理じゃねえか!?

体力が持たねえぜ!」

リボルモンでジョグレしたターゲットモン、グレイモン、ティラノモンが提案する。

「駄目だ!中途半端に竜馬達のリソースを割く方がまずい!

相手はデーモンだ!邪魔にならない範囲でぶつけられる戦力は全部ぶつけねえとまずい!」

「そっちじゃねえ!上の連中だ!」



「聞こえてるぞ!こっちも無理だ!上見て見ろ!とんでもねえ量だ!」

サンドリモンの使い魔を通じての通信が上空でデザイアリングを破壊しているクロウ達へ聞き漏れていた。

「確かに、キリがない!こっちも油断したら憑りつかる!そんな余裕はないぞ!

あのリングの所為でオグドモンにも近づけねえ!」

「ギギギ…」

負傷し、デザイアリングに憑りつかれたのを助けられたギロモンが不意に爆弾を後ろへ放り投げる。

デザイアリングは幾つか破壊されたが煙からまた無数に現れた。

「こら!危ないだろ!」

「やるならやるって言え!馬鹿!放り投げんぞ!」

「という訳だグレイモン!ティラノモン!あのデザイアリングで味方陣営で同士打ちが一番ヤバイ!この戦い、竜馬達がデーモンを討ち取るか、勇太がオグドモンに乗り込むか!そのふたつだけだ!耐えろ!」

「チッ!」



「うおら!!!」

ベルスターモンの拳がデーモン目がけて飛ぶ。

それに併せてサンドリモンが蹴りを入れていく。

「近接戦に完全に切り替えてきたかっヌメモン並みの頭でも少しは学習したみたいだな。」

デジモンの反射神経は銃撃を凌駕し、それを主体にしたベルスターモンの戦い方ではデーモンがいなせる事を学習していた。

それよりは打撃から、隙を見つけ銃撃する方が効果的であった。

更にそこにサンドリモン、ケルビモンが格闘で加わる事で前回のデーモンの一方的な戦いから互角以上にわたり合っていた。

（それ以上にこのお馬鹿のお戦闘センスですわ。

前回のお戦いからお腕が上がっている。

前々からデーモンをお殺しになるお口もあながちお嘘ではありませんわね。

合わせるこっちがお苦労しますわ!）

「今だ! 竜馬!」

ケルビモンが大声を上げる。



地面からチンロンモンが現れるが不意を突くという点では前回と同じだが今回はデーモンを取り囲むように巨大な渦のように回り始めた。

強風とデーモンを狙い打ちにした雷が鳴り響く。
「ふん！考えおったな…倒しきれぬならその巨体を活かし環境を有利に作るとは、つくづく厄介な男だな。」

雷に打たれデーモンの動きが鈍る。

そこに目がけチンロンモンに乗りケルビモン達が強襲を掛ける。

「ぐぬっ！」

この戦いがはじまり、初めてデーモンに対して一方的なラッシュが決まった。

「舐めるな!!!」

僅かな隙間を見つけ無理矢理デーモンがチンロンモンの竜巻から抜け出す。
しかし、それにより身体に大きなダメージが加わった。



「それも狙い通りよ!!!!」

デーモンが逃げ込んだビルが揺れ天上が壊れる。

そこには、ゼクスグレイモンが現れた。

「ゼクス・プライマルは前回の戦いであんたに一番ダメージを与えた技!それを今度は直撃させる!!!」

「ちっ甘い!!!…」

デーモンがゼクスグレイモンを迎え打とうとした瞬間に背後に影を見た。

なんの物体か確証を得られない絶妙なタイミング。

そして、脳裏に前回と違い未だ姿を見ていない魔術師の女の事が頭を巡った。

「氷の鏡か!!!」

周囲には微かに冷気が走っていた。

自分とゼクスグレイモンの間には攻撃に対応できる一瞬程の距離がある。

確実に決めるために、ここで策を巡らせ来た。

デーモンが振り向き爪を振り下ろす。

しかし、目の前にあったものこそが鏡であった。

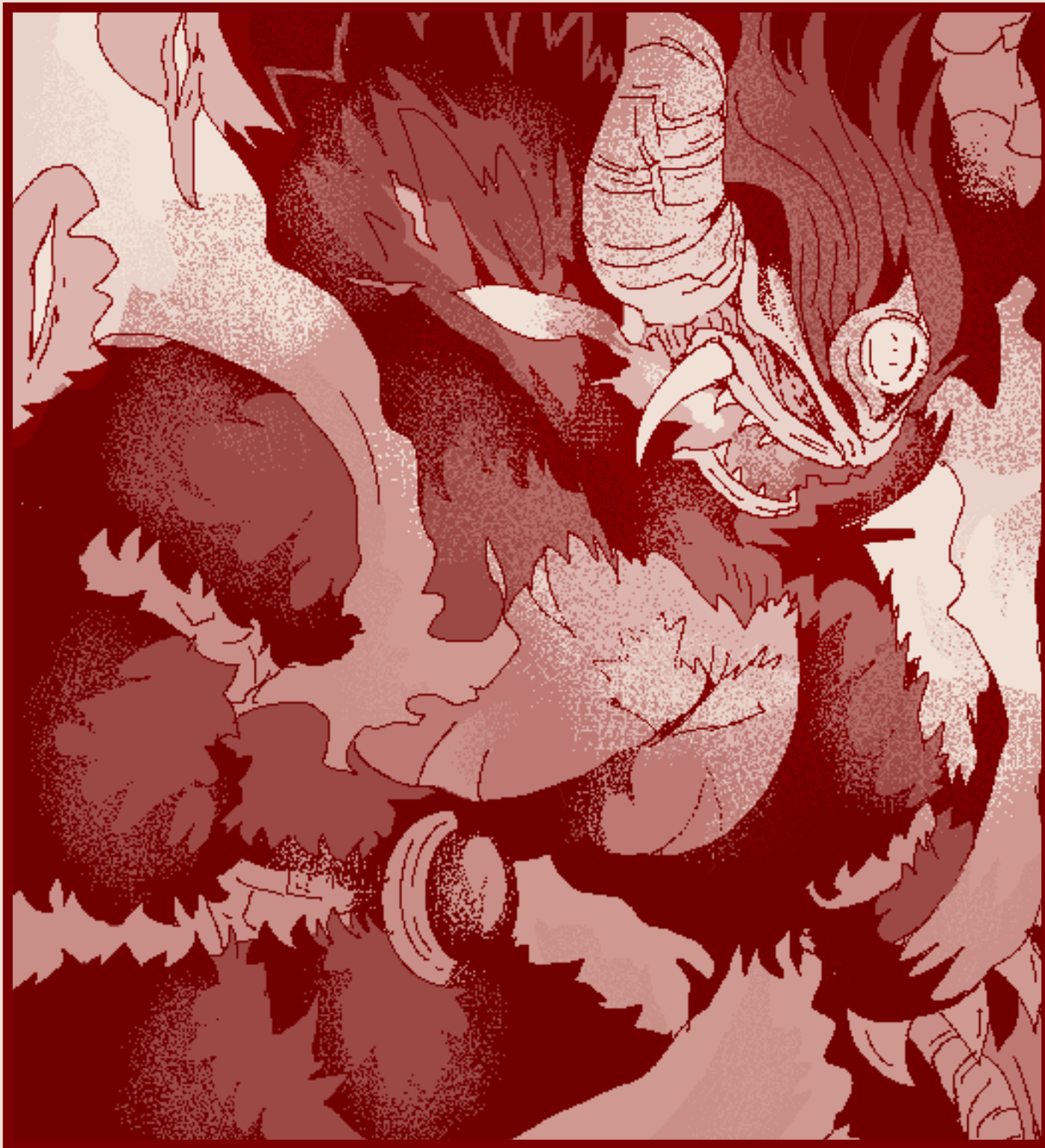
「しまっ!」

デーモンが振りむこうとする瞬間に脚が一気に凍結する。

氷の走ってきた先には、雪奈とザウバーブラウモンがいた。

「いいタイミングではないか…がああ!!!!!!」

ゼクス・プライマルがデーモンに直撃し、大きく吹き飛ばす。



「やった…!?」

煙の中から巨大な炎の柱が上がる。

そこには衣服を焼き切り、獣の姿…デーモンの本来の姿があった。

「まだ、立ってられるのか!？」

「くくく、いやお陰で死に掛けたぞ!楽しませてくれるではないか…!

ここからは本気でいかせてもらうぞ!!!選ばれし子供達!!!ケルビモン!!!!」



デーモンが大きく羽ばたきビルの上に座り込む。

「趣味ではない技だが、まずはお返した。」

くくくこの程度で死んでくれるなよ？」

「!?不味いデーモン様がアレを使う気だ!!!撤退しろ!!!」

「デーモンの配下が逃げていく？」

デーモンの構えを見て、デーモンの配下が蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

「なにこれ?暑…熱い？」

急激に温度が上がっていくの雪奈は感じた。

瞬間、デーモンの後ろに巨大な炎球が現れたのを分かった。

「なんですか…アレ。」

「そうか、お前らには見せたことがなかったな。」

確かにそれは巨大な炎球であったが、一瞬規模が分からないと誰もが思った。

巨大なビルの数倍の大きさの炎がそのビルの遥か彼方に見えゆっくりと、実スピードでは高速であるが、それすらゆっくりと思える。

「太陽…。」

体感の規模で言うのなら正しくその大きさであった。

「私達、こんな化物相手にしてたの…。」



(不味い…!ここで私を完全に削るつもりか!だが!)

「私が止める!!サンドリモン後を頼…!」

ケルビモンが炎球に向かおうとする瞬間、後方からチンロンモンがそれより先に炎球へ向かった。

「この中であんたが一番強いんだ!ここで失う訳にはいかない!!!」

「竜馬!」「竜馬君!!」

チンロンモンが炎球にぶつかり、一瞬の静寂があった後に大爆発が起こった。遙か遠方の筈がサンドリモン達の元にも衝撃が伝わった。

「ほう、やるではないか、では、第2ラウンドといこうか。」

デーモンがゆっくりとサンドリモン達の前に降り立った。

爆発に吹き飛ばされ、遙か遠方へ吹き飛ばされた竜馬であったが、マトリックスエボリューションが解け、トリケラモンがクッション代わりになった事で、傷は深かったが未だ動けた。

「すまない…。」

「大丈夫。ちょっと休めばすぐに動け…竜馬アレ!」

そこには、ロコモンが見えた。

「なんで…あそこに…デジモンの群れに襲われてるのか?」

「違う!そっちもだけど反対だ竜馬!」

「!…勇太と従兄?…それにアレは!!!」



「やったか!？」
メガデスの雨が降り注ぎ、周辺が焦土と化していた。
自身のメガデスにやられインペリアルドラモンに大きなダメージがあった。
叶はシールドに守られ、無傷であり、勝利の確信を得ようとした瞬間であった、
立ち上る煙から上空へ抜ける影があった。
「勇太…!!!」
ボロボロになりながらも、間一髪で致命傷を避けメガデスの雨から抜け出した。



「今だ!!!ラヴォガリータモン!!!!!!」

勇太の指示を受けた瞬間、遠方から光が発せられた。

「これを狙ってたのか!？」

「パートナーを雑に扱う事で隙ができる事は分かってたさ!ここまでの勝機とは思ってなかったけどね!!」

隙を伺い、力を溜めていたラヴォガリータモンが一気に最大出力のメルダイナーをシールドへぶつけた。

シールドが破壊され叶が無防備となった。

勇太達が叶の前に降り立つ。

「…俺達の勝ちだ。」

「…」



「…くくく、勝ったつもりかよ勇太。」

後ろを見ろよ! 勇太!!」

「アレは!? なんで!?!」

そこには、ゴモラから撤退した筈のすみれ達が乗ったトレイルモンがいた。

トレイルモンに気を取られた一瞬の間であった。

後方からインペリアルドラモンの放ったメガデスが勇太達を通り過ぎ、トレイルモンへ向かって行く。

「しまった!!! ラヴォガリータモン!!!!!!」

勇太は、叶達に振り向かずラヴォガリータモンを乗りメガデスを追った。

100m以上も先行しているメガデス、更にその速度はラヴォガリータモンに匹敵する速度であった。

追いつくために最大以上の加速したラヴォガリータモンに勇太の身体が軋み悲鳴を上げていた。

「っっ!!!!!!」

「駄目だ! あの列車には、すみれさんや、巻き込まれただけの人とデジモンがいるんだ!!! 見殺しになんかできない!!!!」

「…死んでも文句言わないでよ!!!!!!」

「ああ!!!!」



「これで…終いか…。」

迫りくるメガデスを前に健太郎は小さく呟いた。

何も感じなかった。ただ、終わるのだと思ったその瞬間であった。

「誰か助けてええええええええ!!!」

泣いている子供の声が耳に入った。

パニックになり大人やデジモンの声が聞こえる中、今まで、それは右手を失くしてからぼんやりとしていた人生が一気に鮮明になった気がした。

健太郎は無意識に身体が動きその子供を庇うような体勢を取った。

「っ!」

メガデスが車両とぶつかる瞬間、その合間にラヴォガリータモンが割って入った。

「メルダイナー!!!!!!」

ラヴォガリータモンの全力を賭したメルダイナーはメガデスを巻き込み爆発し、車両は横転したが死傷者は誰一人として出なかった。

「勇太…!」

健太郎は小さく呟いた。



爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされヴォーボモンに退化し、勇太共々蹲っていた。

「うぐ…勇太死んでない？」

「俺は大丈…夫…、無茶させてごめん。」

「いいよ、慣れてるし…。」

勇太の前に、叶が見下すように現れた。

（クソ…。）

「なあ、勇太。お前何がしたいんだ？」

「何が…って当たり前だろ。」

デーモンを倒して、光を連れ戻して！叶をぶん殴って目覚めさせるんだよ！！

「じゃあ、何やってるんだよ。」

役にも立たない連中庇って、勝てた筈の戦いを自分から放り投げて、お前は俺の前に這いつくばってる。」

「当たり前だろ！勇太は誰かを見捨てたりしない！」

ヴォーボモンが勇太を庇うように前へ出る。

それに合せて、勇太も立ち上がる。

「見せてあがるよ！勇太と僕は選ばれし子供とそのパートナーなんだ！絶対に負けるはずない!!!」

「そうだ…！俺達は選ばれし子供なんだ！…このくらい!!!」

（先のもう限界なんてとっくに超えてるでも…俺が選ばれし子供なら…光を…叶を助けられる筈なんだ！）

「応えてくれ、デジヴァイス!!ヴォーボモン進化だ!!」

「うん!!!!」

しかし、勇太が掲げたデジヴァイスは何の反応も示さない。

「…」

「おい！なんでだよ!!頼む!!!クソ!こんな時に!？」

勇太が何度もデジヴァイスを掲げるがなんの反応もない。



「くくく…ははははははは!!!!」

叶が高笑いを上げ始めた。

「何がおかしいんだよ!!!」

「なァ…勇太。お前今まで不思議に思わなかったのか? いや、薄々感づいてたんじゃないか?」

「なにを…?」

「お前が進化させるたびにデジヴァイスはひび割れていく、そもそもお前が選ばれし子供ならなんでパートナーをともに進化させられなかったんだ?」

「なんで…叶がそれを…?」

「くくく、やっぱりそうだろうな。」

どうやって完全体にさせたかは分からねえが、デジヴァイスは選ばれし子供に与えられるひとりに与えられる専用品だ。

他人が本来使えるもんじゃねえ。」

(霧の街でアルケニモンが光のディヴァイスを使おうとした時も何も起こらなかった…そもそもウェヌスモン様が調整してくれるまで光達が言っていた心がタイマーとデジモンの心が繋がる感覚も全く分からなかった。)

「無理矢理、他人が弄れば容量がオーバーして、壊れてくんだよ。」

そもそもあの時、お前は DW に呼ばれていなかった。

あの時、お前が鬼塚の手を無理矢理掴んだから、ここへ来たんだ。」

(あの時、叶を誰かが飛ばないように抑えていた…。)

「なァ…もう分かってるんだろ?」

「ゆう…た?」

「ヴォーボモン進化だ!!!!」

ヤケクソに勇太がデジヴァイスを掲げようとした瞬間に、デジヴァイスが光に包まれた。

「や…」

勇太が安堵した瞬間、デジヴァイスはそのまま消え、叶の手元に現れた。

「あ…あ…あ…あぁ。」

勇太の顔から力が抜けていく。

「そうだ。」

選ばれたのは俺だったんだよ!

あの日、ルクスモンに邪魔されてなきゃ俺はこんな事する必要なかったんだよ!

お前があん時素直に帰ってれば! お前があの時知らなきゃ! 俺はお前を殺す必要なんてなかったんだ! なのに! お前は何度も何度も俺の邪魔をしがって!!!」

「…」

「まァ、いいさ勇太。」

その分は今からお前は味わうんだからな。」



「…!逃げようヴォーボモン!!」

「…。」

逃げようとする勇太とは違い、無言でヴォーボモンの方へ向かって行く。

「ヴォーボモン!」

ヴォーボモンを掴もうとする勇太の手をヴォーボモンが振りほどく。

「ヴォーボモン…?」

「デジヴァイスは心を繋げる…使い方次第じゃあパートナーの心を支配する事だってできるんだよ。」

ヴォーボモンが葉の足元に来て勇太に対峙するように振り返る。

「なあ勇太、お前勇気のデジメンタルを持ってるんだってな?

まともに使えた事あったか?ないよなあ。

選ばれし子供の資格がある人間にしか使えないからな。」

そう言うとは葉はおもむろにデジヴァイスを掲げる。

「デジメンタルアップ。」

ヴォーボモンに勇気のデジメンタルが重なり、光に包まれる。

「フレイヴォーボモン。」

フレイヴォーボモンは何の感情もなく、勇太へ爪を向けた。

「ヴォーボモン…?」

勇太の中で何かのピースが壊れ、全てが崩れていくのを感じた。

足にも力が入らず、膝から崩れ落ちた。

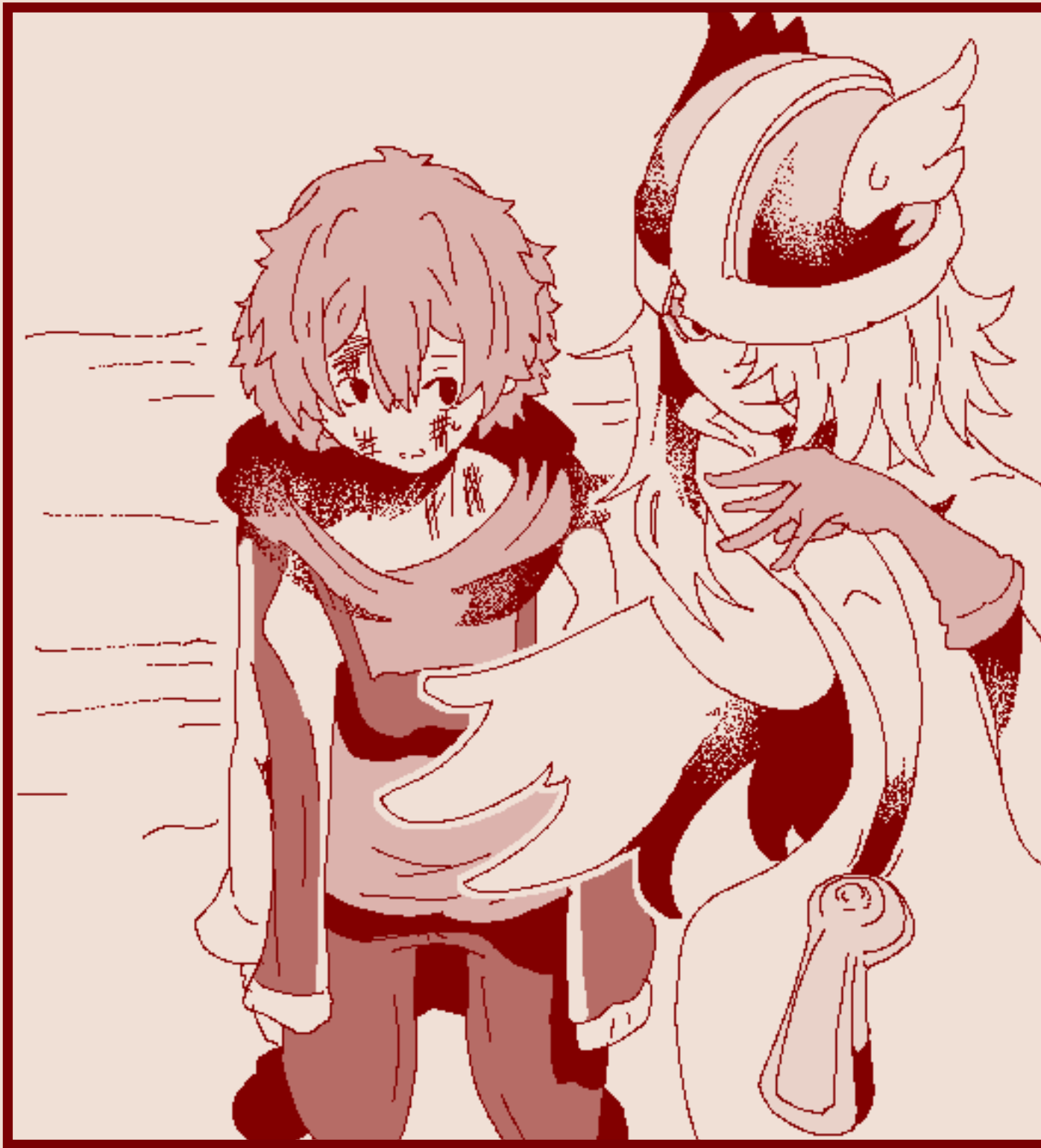
「なあ勇太。

お前昔からヒーロー、ヒーローうるさかったよな。

でも、もうそのヒーローごっこも終わりだ。

ヒーローに憧れてデジヴァイスを掲げてた姿…くく、滑稽としか言いようがなかったぜ。」

「…」



フレイヴォーボモンが勇太の顔目がけて引き裂こうと爪を伸ばした瞬間それは弾かれた。

「今の発言でひとつだけ訂正がある。」

「てめえ…どういうつもりだ。」

「勇太はヒーローごっこから、これから僕と本物の英雄になるんだ。」

「ルクスモン…!!」

そこには、にやけ顔のルクスモンが立っていた。